

2025年11月23日 説教「主人の心を知りながら」

ルカの福音書12章41~48節

この章では、神の国を求めることが、宝を天に積むこと、目を覚ましていることなどを、イエスは教えられてきました。今朝の聖書箇所は、前段との関連性があります。

1. 忠実で賢いしもべ (41~43節)

①このたとえは誰のためか (41) 「そこで、ペテロが言った。『主よ。このたとえは私たちのために話してくださるのですか。それともみんなのためなのですか。』」

ここまで話を聞きながら、弟子ペテロは疑問に思ったのでしょうか。そこで、彼はこれらの教えは一般的なクリスチヤンに語られているのか、それとも12弟子に格別に語っておられるのかと尋ねました。22節には弟子達に言われたとありますが、しかしあらかじめ広く語っておられるのかなど、ペテロは考えたのです。実際に22節以降の教えは、マタイの福音書を見れば、山上の説教で群衆に語っておられるのです。

②忠実な賢い管理人 (42) 「主は言われた。『では、主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食べ物を与える忠実な賢い管理人とは、いったいだれでしょう。』」

イエスはペテロの質問に直接は答えられることなく、別の観点から教えを進められます。それは「忠実な賢い管理人」のことでした。たとえの中の主人は旅する前に、ある人に管理を任せました。自らの僕たちの管理でした。管理をまかされた人は、食事時になると、僕たちに食事を与えるのです。それが着実になされなければ、僕たちは仕事を行わない可能性があります。そこで、管理人は忠実かつ様々な配慮をしてそれをする必要がありました。イエスは問います。忠実な賢い管理人とは、いったい誰でしょう。

③主人が帰って来た時に (43) 「主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。」

管理人は、主人がいる時もいない時も、忠実に働く必要がありました。ただ、主人が外から帰って来た時に、その忠実さを見てもらうことができたとすれば、それは管理人にとては幸いだと言うのです。しかし、主人は39節にもあるように、不意に帰ってくることもあるわけですから、主人が帰ってくる時だけ、都合よく働くというわけにはいきません。いつでも、忠実に働いていなければ、認めてもらうことは難しいのです。

2. 任せられた人の責任 (44~46節)

①全財産を任せる (44) 「わたしは眞実をあなたがたに告げます。主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。」

イエスはその話における重要なポイントを語られます。それは、その主人が忠実で賢いと思われる管理人に、自分の全財産の管理を任せることになるということです。これは大きなことです。食事の管理だけでなく、財産までとなると、その忠実さ、思慮深さが本物でなければ、すぐに化けの皮がはが

れてしまうからです。

- ②不忠実な行動 (45) 「ところが、もし、そのしもべが、『主人の帰りはまだだ』と心の中で思い、下男や下女を打ちたたき、食べたり飲んだり、酒に酔ったりし始めると、」

管理を任された人が、責任を与えられたことを良いことに、思い上がって、不忠実で愚かな行動をとったらどうなるでしょう。つまり、彼が主人の帰りはまだ先だと思い、働き人である下男や下女たちに暴力を振るい、自分は欲望を満たすために、食べたり飲んだりし、あまつさえ酒を飲んで酔ったりしていたとします。

- ③思いがけない日に (46) 「『しもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰ってきます。そして、彼をきびしく罰して、不忠実な者どもと同じめに会わせるに違いありません。』」

39 節にあるように主人はどうぼうのように、思いがけない日に戻って来ることがあるのです。それは真夜中かもしれません。帰ってきた主人はその管理をまかせた人の不忠実な行動を認めればどうするでしょう。彼を厳しく罰し、その他の不忠実な者たちに与えたのと同じ戒めを彼に与えることになるというのです。

3. 主人の心を知っていた人と知らなかった人 (47~48 節)

- ①主人の心知りながら (47) 「『主人の心を知りながら、その思いどおりに用意もせず、働きもしなかったしもべは、ひどくむちを打たれます。』」

ここで「主人の心」とは何でしょう。42 節にあるように、しもべが「忠実で賢い管理人」であることです。ところが、管理を預けられたしもべが、主人の心を知りながら、主人から託された仕事を遂行するために、よく準備もせず、働くこともしなかったとするなら、どうなるでしょう。このたとえ話の中で、そのしもべはそれ相当のむち打ちを受けるというのです。

- ②知らずにいたしもべ (48) 「『しかし、知らずにいたために、むち打たれるようなことをしたしもべは、打たれても、少しで済みます。』」

他方、主人の心をよく知らずに、むちを打たれるような間違いをしてしまったしもべはどうなるでしょう。彼らは主人の心を知っていたしもべと同じように、主人がいない間に欲にまかせて不忠実なことをしていたと推測できます。しかし、彼は主人の心を知らずにやっていたので、むちで打たれる回数などは少なくて済むとあります。

- ③多く求められ要求される者 (48) 「『すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。』」

主人から仕事を託され、主人の意向を聞いている者は、それだけ多くの責任があります。もちろん、それに応じた報酬もありましょうが、彼は忠実かつ知恵を働かせて事をなさなければならないのです。そして、そこには求められることも多くあるのです。また、もしそこに不忠実なことがあるならば、それに対しても責任を問われることになるのです。

《展開と結論》「知恵ある生活」(榎原康夫著)という本があります。副題として、クリスチャン・スチュワードシップとあります。その副題は聞き慣れない言葉かもしれません、預かったものの管理のことです。この本では、次のような章があります。「生命の管理」「時の管理」「福音の奥義の管理」「賜物の管理」「財の管理」「献金の管理」「管理の報告」「家庭の管理」。

今朝の聖書箇所は主の再臨への備えを述べつつ、スチュワードシップ(管理)について、教えられています。第一に出て来るのは、しもべたちの管理を任された人。次には、さらに重要な管理を与えた人が挙げられます。そして、主人が不意に戻ってきた時に、不忠実なことをしていた管理者の中でも、主人の心を知っていた人と知らなかった人の報いが語られます。

言うまでもなく、不忠実なことをする管理人ばかりではなく、忠実に働く人達がいるのですが、ここではあえてイエスは、人間が陥りやすい点をあげています。つまり、主人が見ている時には働くが、主人がしばらく帰って来ないと思われる時には、さぼったり、不忠実なことをしようとすると性質をとりあげて、それを示されているのです。

それでは、私達は現実生活において、どのようなものを主なる神から託され、それをどのように用いているでしょうか。自分は主人である神からそれほどのものを託されているわけではないし、この聖書箇所にあるように、主なる神の心を十分に知らされている者ではないので関係ない、と言い逃れできるでしょうか。いいえ、私達には誰にも、貴い生命が与えられ、貴い時が与えられているからです。まずもって、主なる神から賜っている生命や時を管理する心と祈りをささげていきたいのです。

ある人は思うかもしれません。自分には能力がないし、賜物もないから、用いようもない。主イエスはこんなとえでも教えられています。旅に出る前に、主人は自分の財産を一人には 5 タラント、人には 2 タラント、もう一人には 1 タラントを与えられたというのです。すると、5 タラント、2 タラントあずかった人たちはそれを用いてさらに儲けたのです。しかし、1 タラント預かった人はそのお金をそのまま隠したというのです。前者の二人については主は忠実だと言われ、後者については銀行に預けておけば利息がついたであろうと言われその不忠実を指摘されています(マタイ 25 章)。自分に与えられているものは、大きい小さいに関係がないのです。そもそも 1 タラントは 6000 デナリの価値があるのです(1 デナリは一日分の労賃)。一人一人に授けられているものは決して小さくはないのです。

パウロは「私はどんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。私は貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っています。」(ピリピ 4:11, 12)と述べています。

与えられている多少ではありません。今、あなたに主が与えてくださっている恵みのものを数え、それらを感謝しましょう。そして、与えられているものを用いることが出来るよう祈りましょう。それらを用いていく時に、主は「忠実な賢いしもべだ」と言ってくださるのであります。